



## 20年目を迎えて思うこと

江口 美樹

私はライン工房の一員として仕事を始めて、今年で20年目を迎えます。ライン工房との最初の出会いは専門学校時代で、先輩が就職していたこともあり、ライン工房の仕組みや考え方など話を聴いてとても魅力を感じ、実習先として希望したことから始まりました。実際に実習生として一緒に過ごす中でより一層共感する部分が多く、卒業後に運よくライン工房の仲間入りをする事ができました。

入職して最初の部署は、身体しょうがい者自立支援事業のパーソナルアシスタント（支援者）として、地域で一人暮らしをしている方の自宅を訪問し、掃除や調理、買い物などの家事を一緒に行ったり、銀行や郵便局、公的機関での手続きの同行など、その方の生活に合わせた細やかなサポートを行うことでした。当時は、今のようなヘルパー制度が充実しておらず事業所も少ない時代で、一人一人のライフスタイルに合わせた支援は先駆的な取り組みでした。しかし、専門学校を卒業して社会人1年目の私にとっては、毎日が勉強でした。しょうがいのある方への支援や専門職としての経験もなく、人生経験のある先輩方の支援をどのように行っていくのか、「自立支援」とはどんな支援を目指すのか、毎日の関わりを通してたくさんのことを勉強させていただきました。

その後、熊本市しょうがい者生活支援センター青空の相談員としても、地域で暮らすしょうがいのある方への支援に携わり、一緒に寄り添った支援を心掛けてきました。現在はライン工房の相談員として業務を行っていますが、その中で大事にしていることは、今だけに焦点を当てず、将来的な先も見据えた一人一人に寄り添った支援です。現在ライン工房を利用されているメンバーさんも、更なるステップで一般就労を目指したり、身体の状態に合わせて他のサービスを使ったり、また、年齢を重ねて介護保険のサービスを利用する時期が来ることと思います。その時期を突然迎えて急な選択を迫られることなく、自分で悩んだり、決めたりする機会を一緒に作っていき選択肢の広い将来

になるような支援ができることを目標にしています。少し大ききかもしれません、一人一人の人生の中でライン工房で経験したことが、その方の記憶に残るような関わりができればと思っています。そのためには、日々の支援を大切に、将来どんな生活をしたのか、その実現のためにできることはないのか、一緒に考えていきたいと思っています。

また、ライン工房では、開設当初から現場の支援員とは別に相談員が数名配置されており、個々の相談に柔軟に対応できる体制が整っています。支援員と相談員を別のスタッフが担うことで、内部の支援の在り方についてもチェックできる機能も保たれます。この点もライン工房の魅力の一つだと誇りに思っています。

この20年は、私自身の生活も大きく変わりました。新しい家族ができ、主婦として母としての役割も加わり毎日を忙しくしていますが、2つの視点もプラスした、より厚みのある支援ができるようになっていきたいと思っています。

ライン工房の

「L = Livelihood (暮らし)」

「I = Independence (自立)」

「N = Normalization (正常化)」

「E = Energy (力)」

という理念を改めて考えると、一つ一つに深い想いや願いが込められていること、自分自身の支援の基礎となっていることに気づかされる今日この頃です。(^^)

